文化財見学シリーズ 7　　姫路市教育委員会（昭和56年3月31日発行）

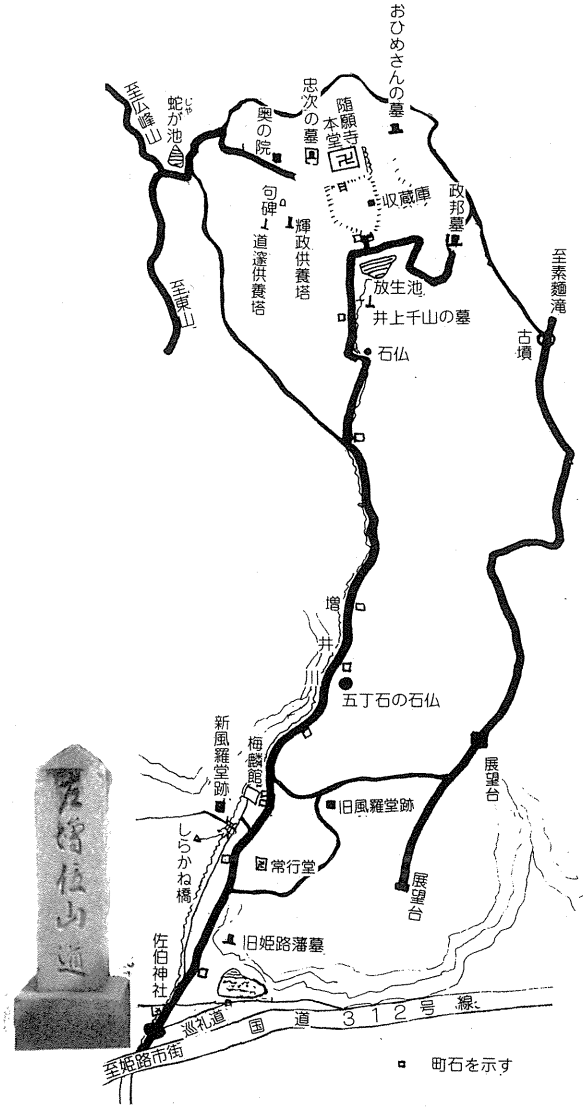
『増位山』をたずねて

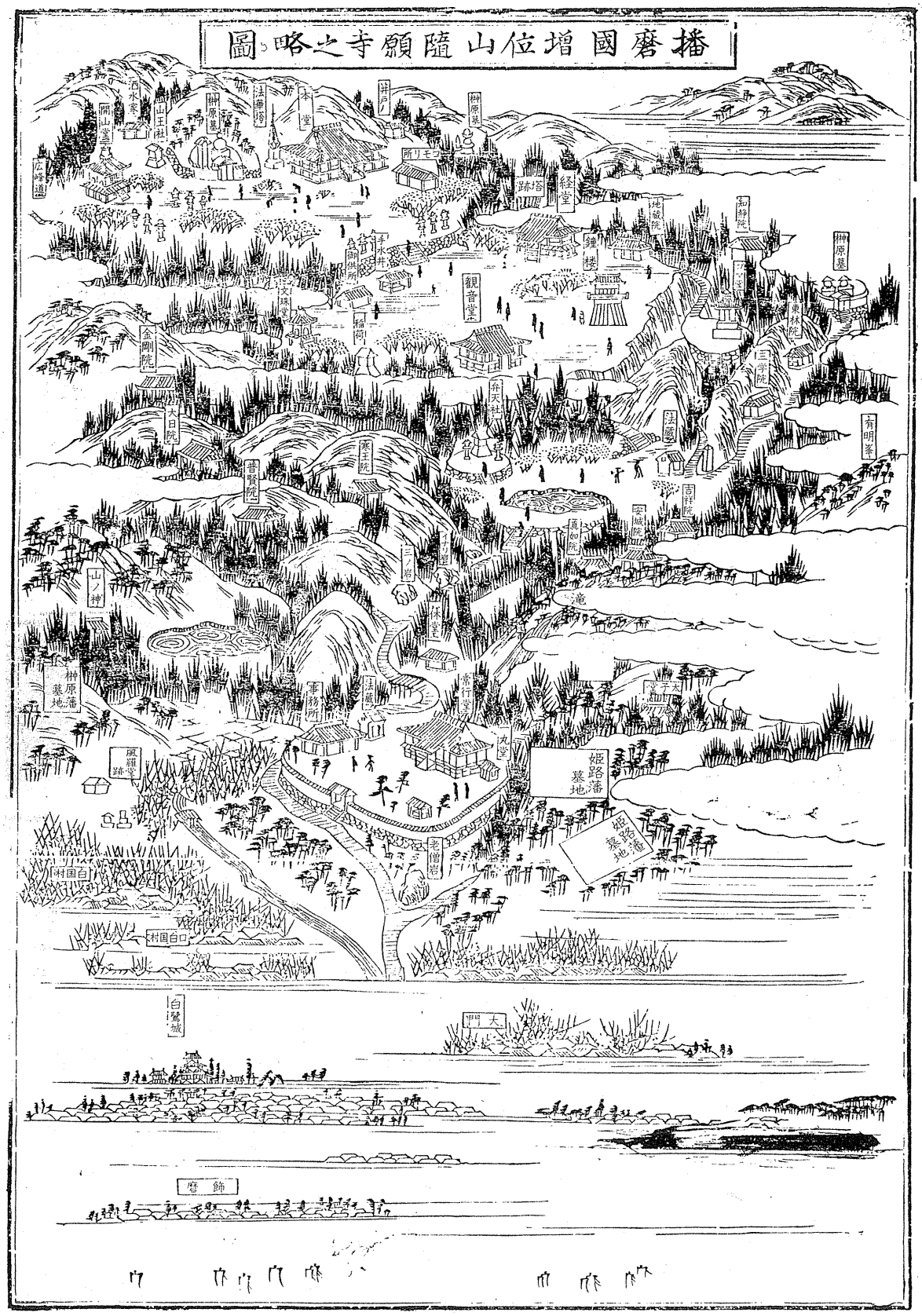
白国　増位、広峰の連山は、白国神社の注連柱に書かれているとおり「嶧迫って瑞雲罩む」の感を訪れる人びとにあたえる。白国は、この山塊の南麓にあり、古くから文化がひらけた。随願寺は現存する寺のうち市内最古の寺として名高く、白国神社は「播磨四の宮」として由緒が深い。江戸時代になると芭蕉の遺品を収めた風羅堂も建てられるなど名僧、俳人、智識人が逍遥したことであろう。いまもその雰囲気がただよっている。

佐伯神社　『播磨鑑』に佐伯社の略縁起がのっている。それによると、この付近は古い時代から佐伯氏―白国氏の社域であったようである。享保19年（1734）当時は、「野狐禽獣の栖」になっていたのを、子孫の白国宗得が社壇を建立して佐伯社を再興したと見えている。

町石　参道の町石には舟形光背の地蔵さんと、角塔婆との二種類がある。町石の原形は、石の卒塔婆を一町ごとに立てたことに始まり、のち種子（種子字）や仏像を彫りだしたり、方向を示すようになった。

姫路藩墓地　弁慶岩（老僧岩ともいう）の奥にあり、ここには姫路三山と称されたうちのひとり春山弟彦家、考古学者で人見塚を調べた和田千吉家の墓や、幕末の家老高須書山、河合寸翁の父川合甚四郎の墓や紅粉屋児島家、国府寺家の墓もある。児島家の墓域内では、姫路藩の名筆井上松香の筆跡が見られる。





随願寺提供　もとは木版、文字だけ活字に改めた。

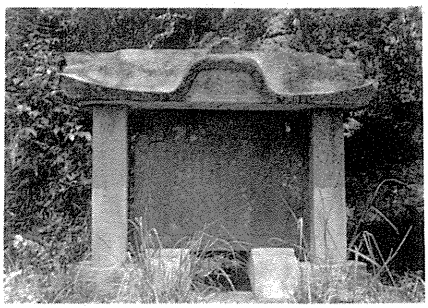
常行堂　念仏堂ともいう。播磨西国三十三か所の札所。芭蕉ゆかりの蓑と笠を保存している。境内には、いま手洗に利用されている石棺の蓋のほか句碑２基がある。

蓑塚と風羅堂跡　芭蕉の遺品は門弟広瀬惟然をへて門下井上千山に伝えられた。千山は正徳３年(1711)故郷姫路に帰り、増位山麓に蓑笠の塵を埋めて蓑塚をつくった。しかしその場所はさだかでない。現存の蓑塚は石造、衝立型で増位川の西にある。風羅堂は千山の子寒瓜（桐笑）が、父の遺志をついで寛保３年（1743）太子谷に建てたもの。芭蕉の像を祀り遺徳をしのんだ。堂はのち寛政５年（1793）寒烏、寒鴻、寒桐らによって増位川の西に建てかえられ、千明、栗堂、守三と受けつぎ、播磨における蕉風俳諧の道場であった。風羅堂の名は、芭蕉の別号「風羅坊」からとったもの。

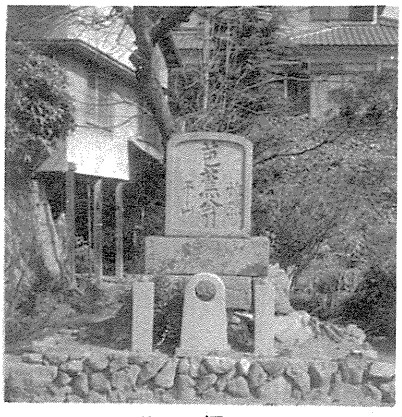
五丁石の石仏　五丁石付近は通称「セキトダニ」といい、斜面の消えかけた道を上ると石仏がある。一体は地蔵、一体は聖観音、いずれも童顔の座像。

井上千山の墓　千山は風羅堂第３世を称した。その墓は不動の滝を少し上った参道からも見える。

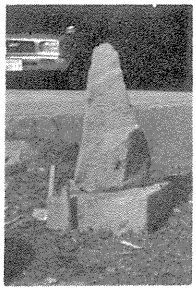
随願寺　奈良時代に始まった古寺で、書写山円教寺と並称される名刹。寺伝によれば、はじめ法相宗であったが、承和元年（834)天台宗となり、古今を通じて朝野の信仰が厚かった。山上にはもと30坊もある大寺院であった。天正元年（1573）三木の別所長治に攻められ焼失したが、天正13年（1585）秀吉により再興、いまの本堂は寛文６年（1666）、姫路城主榊原忠次の建立になる。本尊薬師如来は県指定文化財。収蔵庫には平安期作の重要文化財毘沙門天像が安置されている。



酒井忠恭句碑　（野元保氏提供）
〝はせを葉や 風にやれても 名は幾世〟
石製の屋根は句碑保護のため、昭和15年につくられた。



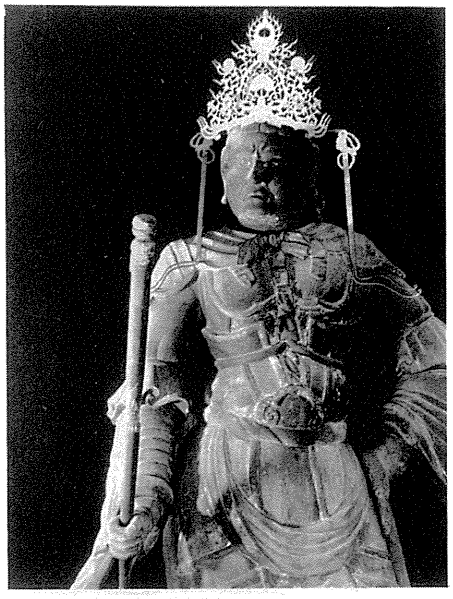
蓑　塚



栗堂の句碑
“白露の天涯もなし……(以下不明)

千明の句碑
“さくらほど散るものの裳なき夕かな”

随願寺本堂

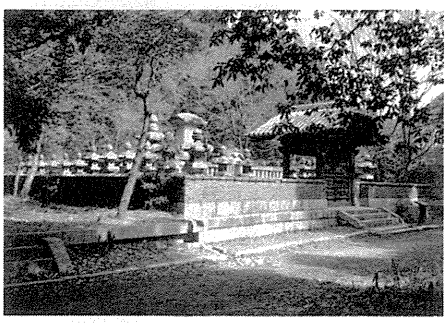


重要文化財　毘沙門天立像
（神戸新聞社撮影・随願寺提供）

榊原忠次の墓　墓制では「塔、灯、墓碑、墓標」を配置するのを正式なものとしている。姫路城主榊原忠次の墓は、その典型的なものであろう。亀趺（きふ）にのる墓碑の長文に目を見はる。この墓誌を読破したら「カメ」が動くという伝説が生まれた。

実相院の墓　実相院は榊原政邦の側室で、世子政祐の生母。婦人病になやみ、死後は同病に苦しむ人を救いたいと遺言したことから「しも」の病に霊験あらたかとして参る人が多い。この墓を「おひめさま」と呼んでいる。

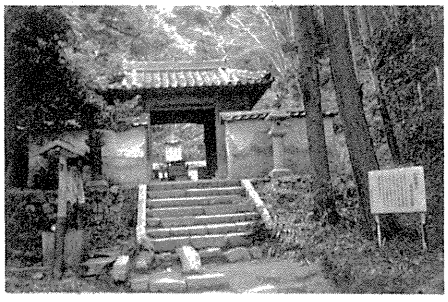
榊原政邦の墓　榊原氏は寛文７年（1667）、政房の死去とともに越後村上に移り、松平、本多氏ののち宝永元年（1704）政邦が再び入部してきた。放生池の東の道を右回りに行けば、政邦夫妻の墓がある。



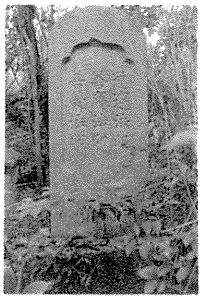
榊原忠次の墓

池田輝政の供養塔　奥の院の左、雑木の茂る斜面を行くと東面して五輪塔がある。地輪の中央に「池田輝政塔」左に「慶長十八年正月二十四日」とある。

道邃（どうすい）たちの供養塔　西谷山地蔵院墓地にある。道邃のほかに善慶、善栄の名を刻んでいるが、このうち道邃は、姫道山称名寺（現、五軒邸の正明寺）を姫山に始めた人で、のち随願寺第17代の長吏となり、保元２年（1157）４月15日、地蔵院に寂（じゃく）した。



実相院の墓



道邃たちの供養塔

長唄

『城の栄え』

蓬庵　作
坂部勢以　調
（大正元年　鷺城新聞撰歌）

本調子
うち渡す、眺め広峰
増位山
なびく霞の
ひまもれて
こぼす笑顔も
なつかしき
桜がさねの花衣（合）
枕に通う　夢さきの（合）
逢瀬いつかと
待つかいは
あり明月に　音づれを
聞いて嬉しい
時鳥（ほとときす）
ヨイ〳〵〳〵
ヨイヤサ（合）

■編集　山谷　巌（姫路市白国1269－１）